

国文学研究資料館報

第4号

昭和50年3月30日

二次情報の種類

水谷静夫

標題のついていない論文というのは、一つも無い。論文を書けば題をつけるのが当り前である。しかし、論文に要旨とかキーワードとかをつけよと言われると、反撥する人もあろう。反撥まででないにしろ、何か余分なものという感じが、国語学・国文学の研究者の間には、今なおあるまいか。

これには色々な理由が考えられる。面倒臭い——という、理由にならない理由、但し実際上は無視し難い理由は別として、ある人がこう言った。論文の性質によっては圧縮しかねる論じ方をしたのもある。それを無理に要旨に仕立てて、その要旨を読んだだけで原論文が分った気にならなくては困る、と。尤もだが、ちよつと待つて戴きたい。そう言うあなた

は、學術誌を手にした時、標題も見ずに読み出しておいでですか。

標題を見渡して、これは面白そうだから読んでみようとか、ちよつと気になるテーマのようだが、そのうち暇を見てとか、あるいは全く関心なしとか、思つたとすれば、既に、原論文（の本文）によらずに原論文の選択をしている事になる。

標題のこういう利用法を一步進めて、読む読まないの選択の手伝いをするのが、要旨やキーワードである。標題は元来、人に氏名があつてそれで個人を識別するように、個々の論文を識別する為につけたのかも知れない。しかし物理学の本に「国文学の諸問題」のような題名を与えない——その点では名で体を表わそうとの意図も働いている——事からして、

—— 二次情報の種類………水谷静夫：1

—— 本館新取「好色一代男」について………松田 修：6

—— 海彼に学んだこと………松田 修：6

—— 文献資料部事業報告………大久保正：8

—— 研究情報部事業報告………古川清彦：9

—— 評議員会議（国文学部会）の開催………12

—— 人事異動………12

—— 受贈図書………13

—— 昭和五十年春季学会開催一覽………16

標題を情報選択の手掛りに使うのは、全く自然の事である。だとすれば、標題よりは長い表現をとる要旨によつて、同様の事をしていいはずではないか。無論、へたな要旨ではかえつて人を惑わすが、同じ事は標題についても言える。

氏名だけでは善人か悪人か分らない。顔を見れば幾分か見当がつく。それとて、悪人づらをした好人物が居ないわけではない。標題が氏名だとすれば、要旨やキーワードは顔つきにたとえられよう。顔で人物を判定してはならないという倫理的教を百パーセント忠実に守っている人は無からう。世の中がのんびりしていた時代なら、要旨やキーワードのような二次情報は無くて済んだかも知れない。こう発表物が多くては、自分の専攻分野の論文でさえ、一説はおろか、どんなものが発表されているかを押えている研究者は、まずはあるまいと思われる。必要な人に必要な情報が届きやすくする為、二

次情報が必要なのである。以前、ある図書館で高木市之助博士の『吉野の鮎』が動物学の門に分類してあつたという事を、聞いた。要旨でなくともよい、仮にキーワードの一つに「古代歌謡」がつけてあつたら、こういう誤りは起るまい。西洋の例でも、社会学概論書の題に『プロメテウス』を与えた学者があつた。こうした標題は、知っている者にとつては含蓄が深くなかなか魅力的である。私自身も、まんざら嫌いではない。しかし紛らわしい題名の為に初めから誤解されて、広い読者の利用を妨げるものになつたら、いかにも残念ではないか。文人趣味も程々という批判は出来る。ここで、題名は改めなくても、適当なキーワード群が付けてあれば、事情は余程違つて来る。

我々の周囲には、二次情報を整える慣わしがまずは無かつた。その為、二次情報化の仕方でも下手なら、出来栄えも余り宜しくないといった状態

にある。要旨作成を求められると論文の頭と末との敷衍をつつないだようなものでお茶を濁す——といった傾きが、無いではない。それでは役に立たないのも当然であろう。逆に、本文には書いてない事を書き加えたのもある。それでは要旨ではない。要旨には実際上は広告の機能に似た働きもあるが、右のようなのは誇大広告に類する。

＊

今まで「要旨」とか「キーワード」とか事も無げに言ってきたが、実はそれらにも色々な手のあるものがある。ドクメンテーションや文献情報検索では常識化している事柄ながら、どうした事が、それがそれ程は一般化していない。本来、専門情報への接近というわざはドクメン屋やIR屋の為にあるのではなく、その種の情報を必要とする利用者側の為にこそある。その利用者側が無関心で居ては、いつまでたっても、よい検索・流布のシステムは出来ないであろう。この小文を書かされるに至ったのは、私が雑誌「計量国語学」の編集実務を通じてそういう事に関心があるから、幾分でも橋渡しをせよという事らしい。そこで、以下に、かいつまんで

二次情報の種類について述べる。それらの概念規定についても、細かく言えば色々な問題はあつた。しかしここでは余りうるさい詮索はしない事にし、まず大体の概念をつかんで戴くとしよう。

＊

普通「要旨」と総称するものにも種類がある。英語の呼び名とそれに当る日本語とを組にして並べてみれば、

- 1 summary 要旨 要約 概要
 - 2 outline 梗概
 - 3 synopsis 摘要 要約
 - 4 abstract 抄録 要約 梗概
- これらの概念に区別が有るような無いような——習慣上確かに使い分けられているが、さてその区別を誰もか納得するように立てるとなると、かなり困る。右の日本語の呼び分けが一定しないのは、英語の方も別語を使いながら区別が明らかでないからであろう。

このうち、やや特殊なのは2の梗概である。科学・技術文献については余り使わない。物語・小説・評論の筋の要約、つまり筋書きといった場合には、2を称するようである。1が人文科学の分野では多く使われ、

しかも原著（原報）に付けられる事が多いが、さて3や4と違つかと言え、どうもそんなに変わらないように思われる。

自然科学や技術の分野では普通に、4、そして3が使われる。この実際上の区別は、後者3（摘要）が、原報の標題部と本文との間に置かれるのに対し、前者4（抄録）はそうとは限らない——抄録だけを集めた雑誌（抄録誌）もある——点だとも言える。事実ISO（国際規格機構）の一九六〇年勧告案（文書一九九号）では次のように定義している。

抄録は、記事または他の著作物の短い表示で、独立に刊行され適当な書誌的参照を含むものである。その記事または著作物に付せられた（著者の）摘要に基づくが、通常は著者以外の人によって作られる。

摘要は、記事または著作物の内容の総括である。本文それ自体の結論に関するどんな総括とも区別するため、常に、記事または著作物の標題と本文との間に置く。これによると、抄録は原報とは別に刊行されるものに限る（従って原報の書誌的事項の表示を伴う）ことになる。また、原報末とか掲載誌の末

尾とかに付したものは「摘要」とも呼べないことになる。摘要の方はそうした習慣的呼び名になっていると思われるが、抄録を右のように限るのはいささか狭いようである。いずれにせよ、これらは、その原報（本文）の内容が、それを読む必要ありとするほどの関係の有無を読者に判断させるだけの、言説・結論の要点を提供するものでなければならぬ——と、されている。

さて「抄録」を右の規定より緩く解して、つまり我々が「要旨」と呼んでいるものに近づけて考えて、三つの観点からその種類を述べてみる。

一、指示的 (indicative) か報知的 (informative) か
 簡単に言ってしまうと、指示的抄録が原報で何を扱っているかを示す短い抄録である（従って文体上もいわゆる電報文スタイルである事が多い）のに対し、報知的抄録はそれをどう扱っているかも分る程度に論旨を要約し、主なデータも含める事のあるものである。前者から更にテニヲハの類を削ってしまったら、あとで述べるキーワードの列に近づく。私個人の経験で言えば、指示的抄録は余り有難くない。作り方の上手下手にもよるが、それくらいなら、上手に付

けたキーワード群でも間に合う。抄録を作る以上は報知的にしてみたい。また、論文の頭と末とを連ねた一種のキセルや、原報に無い事柄を書き込んだ類いの粗悪品を、我々の周囲ではよく見受けるが、それだから「要旨なんて無駄だ」という声が絶えないのだろう。これは、関連科学分野の抄録(誌)から利益を得ている者として、序で一言した次第。

- 二、著者抄録か他者抄録か
- 三、同時掲載抄録か否か

〔著者抄録〕は、無論、原報の作成者自身による抄録である。その発表物に同時に載せる抄録は、普通、著者抄録である。なお、著者抄録が必ずしも他者抄録に勝るとは言えず、両者には次のようなそれぞれの長短がある。

- 著者抄録 他者抄録
- 原報と同時 入手が可能
- 作成費は著者負担
- 内容を知らず書く
- 主観が混りやすい
- ×作成費が必
- ×抄録者の誤
- ×客観性が保
- ×解・無理解の危険あり
- ×著者が時間的に後になる
- ×作成費が必
- ×抄録者の誤
- ×客観性が保

×原報が同類でも抄録スタイルが区

○統一のある形式・スタイルで書ける

×要約のバランスを失い

×抄録法に慣れない者が多い

×すぐれた抄録者が得がたい

次に〔キーワード〕に類するものに触れよう。これらの総称として「索引(index)」を使うのが普通であるが、これは困った事で、せめては「索引見出し(index entry)」と欲しい。なぜなら「索引」はこれらによる情報の編纂物を指す語として我々は使って来ていたし、両者の区別は情報管理の理論の上でも必要事だから。

索引見出しのシステムには非常に多くの種類があるので、小文ではその名前だけ列挙する事も出来ない。UDCコードのようなものまでこれの一種と考えられる。それらの分類をする観点として重要なのは、従ってその性格を考える点でも大切なのは、次のような事であろう。

一、自然言語表現によるか記号化するか、または両者を併用するか。

二、一定範囲の索引見出しから選んで付けるシステムか否か。(見出し語彙が閉じたものか開かれてるか。)

三、索引見出し相互の関係を表すする方法が決められているか否か。

これらの観点でどの仕方を選ぶかには、これまたそれぞれの長短がある。それを説く余裕は無いが、(広義の)抄録に対して索引見出しによる長短が何かだけは述べよう。長所は、抄録より簡単に作れる(と考えられる)事、抄録より概して短い表現で済む事、また短所は、長さがほぼ等しい場合でも、抄録ほど正確には内容が示せない事である。なお、索引見出し立てでも、著者がするか他者がするかによる長短がある。こちらは抄録の場合とほぼ同様である。

以下、我々に割合になじみのあるキーワード(厳密には「keywords and key phrases」の場合)については「記述子」と呼ぶについて述べる。これは、原報の要点とか後に利用されるような点とかを表わす語句を、原則

として原報の表現の中から選んで(十から二十程の個数)付ける方法である。記述子が統制されていない(即ち開いた語彙だ)から、新しい概念が提出されていても困らない。反面、記述子の一意性が保証出来ない(即ち、同じ記述子が他の論文では異なる事柄を指したり、異なる論文の異なる記述子が全くあるいは殆ど同じ事柄を指したりする結果になる事が珍しくない)。

こうした短所があるにも拘らず、うまく付けてあればなかなか重宝である。例を出すのが速い。論文の題露等による序歌の一考察

を見れば、大体的見当はつく。その上に、もし次のような記述子列が与えてあれば、利用者にとって、この原報を読むか否かの意思決定は、題名だけの場合より確実に出来よう。

序歌 序詞 「万葉集」 上代短歌 「露」「霜」「霧」「消、消ゆ」 対照の技巧 「月」「花」「桜」 史的

データの統計解析 確率的見地 一様性検定

更に「data flagging」として、例えば「万葉集詳細データあり」、古今集五六六番等に言及あり

とても書いてあれば、判断がなお容易になろうと思う。

右の記述子列では、いわゆる科学技術分野の場合にはしない若干の工夫が加えてある。一つは文献名の表示に「」を使い、一つは言葉の表示に「」を使った事であり、これは我々のような研究分野の場合に大切だと言わなければならない。なぜなら、これで記述子がもし

■ なら肉体の一部である対象、

『鼻』なら例えは芥川 の 作品、

「鼻」なら日本語の「ハナ」という言葉

を、原報が扱っているという区別が出来るからである。

どういいう見出し立て方法が良いかは、利用目的による。また検索の際に専ら人の目であるかハンドソートカードを使うか電子計算機に処理させるかというような手段、更に検索要求表現(いわば質問文)としてどんな形まで許すかという文法にも、依存する。内容だけでなく、論文・単行本・随筆・新聞記事等の資料別の情報も必要かも知れない。また、右の例にせよ、仮に自分の勉強用の、悪いたとえだが(手口カード)式に使う自家用システムなら、記述子にカイ二乗検定 二項分布 直接確率計算法を加えておくのもいいであろう。

本館新収『好色一代男』について

第三文献資料室

昭和四十九年本館が購入した原本類の中で、一本をあげるとすれば、『好色一代男』であろう。次に書誌の概略を示す。

大本八巻を一冊に合綴。本文版下
水田西吟筆、挿画西鶴。落月庵西吟
跋。袋綴水色後表紙。紋様菊に唐草
おし型。匡廓四周单边。縦二十・四
横十九・三。本文十一行。跋
七行。巻一から巻七まで、各二十二
丁、うち目録各半丁。巻八は十八丁、

当然の事ながら、二次情報を何の為に仕立てるのかと言えば、必要な人(更には、必要なのに気づかず居る人)に原報への接近がしやすくなるように、である。利用を予定しない二次情報化には価値が無い。書目や論文目録で満足出来た時代は、もう終りつ、あると思う。(但し書目・論文目録が不要だと言うのではない。)

(情報検索委員長

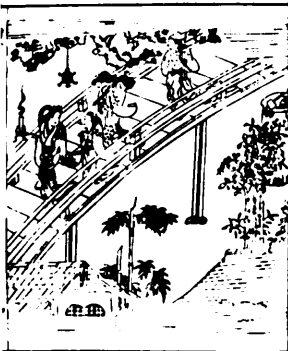
東京女子大学教授)

うち目録半丁、跋二丁半、刊記半丁。

挿画は巻一から巻七まで各七面(四表・七表・十表・十三表・十六表・十九表・二十二表)、巻八は五面(四表・七表・十表・十三表・十六表)。

題簽剝落、左肩に痕跡あり。目録題「好色一代男 巻一(一八)目録」。

内題なし。柱刻「男二(一八)丁数」。刊記は「天和二戌年陽月中旬ノ大坂 思案橋荒砥屋孫兵衛可心板」。



以上述べたかぎりでは、本書はいわゆる荒砥屋版に属する一本であるに過ぎない。しかも、それは合綴本であり、題簽もない。合綴にさいして、天地を載落したものと思われ、

縦二十四・三。横十八・三。四。横大本としてもかなり特殊な寸法となっている。いつこの改装が行われたか、明確には掴みがたいが、原装は、前小口の状況から察するにおそらく八分冊であったかと思われる。

改装がかなり早い時期であろうことは、本文第一冊分全丁と第二冊分六丁目まで左下端に古い鼠害があるが、表紙の欠損と正しく一致することからも推測されるだろう。原装の面影は、ほとんどなく、このように天地のつまった状態ではあるが、本書はなお現存の『好色一代男』の中で、最善本の一つと称しうると思う。鼠害部分を除いて、驚異的に保存良好である。虫損も、汚れもない。文字は極めて鮮明であって、荒砥屋版の初摺の中でも最も早いものである。赤木文庫本(以下便宜赤木本、主として古典文学会の複製によった)、早稲田大学附属図書館本(以下早大本)、さらに後れた刷ではあるが天理図書館本(以下天理本)等と比較検討して、現存荒砥屋版『好色一代男』

の中で、本書の占める位置を考えてみよう。

赤木本と本館本の著しい相違点の第一は、前者においては巻一と巻三の最終丁(各二十二丁)の柱刻、ならびに裏の匡廓が刷られていないのに対し、本館本はそれぞれ、「男一 二十二」「男三 二十二」という版心を持ち、裏匡廓が存在することである。

この点については、早大本と本館本とは完全に一致している。なぜ赤木本において、この様な現象が見られるのか、そこには種々の想定が可能であろう。しかし、それは当面の問題ではない。ここでは、巻一・巻三両冊最終丁の状況に関して、本館本と早大本とは完全に一致することを確認しておく。

本館本と、早大本はこの問題を離れても種々の点で一致するところが多い。当然、同一版本の極めて近い時期の刷としてよい。一字一劃の些末に拘泥して、かなり丹念に比較検討しても、両者の一致は鮮やかである。(ここでは一々テーターをあげない。)

今かりに巻一の第一丁をもとに、赤木本と本館本の比較を試みよう。一丁表の匡廓ではどうか。

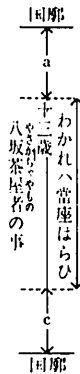
(左の数字については、厳密を期したが、採寸条件その他で、幾分の流動性があるものと諒承されたい。)

| | 本館本 | 赤木本 |
|-----|-------|-------|
| オ縦右 | 二〇・四 | 二〇・〇 |
| オ縦左 | 二〇・二 | 一九・八五 |
| オ横上 | 一六・三 | 一六・一 |
| オ横下 | 一六・三 | 一六・〇 |
| ウ縦右 | 二〇・二 | 二〇・一 |
| ウ縦左 | 二〇・六 | 二〇・二 |
| ウ横上 | 一六・二五 | 一六・一 |
| ウ横下 | 一六・三 | 一六・〇 |

この差は一体どこから出て来たのか。一丁表縦右の匡廓のごとく四耗の差というのは、かなり大きく、無視がたい。整理していえば匡廓に関して、本館本は大きく、赤木本は小さい。しかし、巻一の二丁の例のみで、そういう切つてよいかどうか。前述のごとく、二十二丁目の裏半丁が空白のままという点において同一条件である巻三では、匡廓は次のごとくである。

| | 本館本 | 赤木本 |
|-----|-------|-------|
| オ縦右 | 一九・九強 | 一九・七 |
| オ縦左 | 二〇・一 | 一九・八強 |
| オ横上 | 一六・三強 | 一六・二 |
| オ横下 | 一六・三 | 一六・〇 |
| ウ縦右 | 二〇・一 | 一九・九 |
| ウ縦左 | 二〇・四 | 二〇・一 |
| ウ横上 | 一六・二 | 一六・一 |
| ウ横下 | 一六・一 | 一五・九 |

巻一ほどのことはないが、かなりの差(三—一耗)をみることでできる。しかもその反面、同一版本であることは一点の疑問の余地もない。それは当然のことながら、匡廓の寸法に止まらない。字長を検すれば、巻一と巻三では明らかに本館本が長く、赤木本は短い。たとえば巻一と巻三の二丁表最終項目では次の如くである。(採寸は次の要領で行った。)



| 巻一 | 本館本 | 赤木本 |
|----|------|-----|
| a | 三・四強 | 三・四 |
| b | 九・八 | 九・五 |
| c | 七・一 | 六・九 |

| 巻三 | 本館本 | 赤木本 |
|----|------|------|
| a | 三・二 | 三・一五 |
| b | 九・四 | 九・四弱 |
| c | 七・四五 | 七・三五 |

同様巻一と三の第二丁表第三行(本文第四行)の字長は、

| 巻一 | 本館本 | 赤木本 |
|----|-------|------|
| 二 | 二〇・〇五 | 一九・六 |
| 三 | 二〇・〇 | 一九・六 |
| 四 | 二〇・一 | 一九・七 |
| 五 | 二〇・〇 | 一九・六 |

| 巻一 | 本館本 | 赤木本 |
|----|------|-------|
| 二 | 二〇・強 | 一九・〇五 |
| 三 | 二〇・強 | 一九・九 |
| 四 | 一九・九 | 一九・七強 |
| 五 | 二〇・一 | 一九・九弱 |

以上は、ごく恣意的にえらんだ比較個所であるが、これらの数字の物語るところを、どのように受け止めればよいか。

ここで当然浮上してくるのは、木村三四吾氏が、『頼原文庫本冬の日』で示された、版木を反復使用することによる版面縮小の現象である。

同氏によれば、「版木の枯燥、乾湿による料紙の伸縮作用」等、多くの理由が数え立てられているが、その理由はともあれ、この説によるかぎり、赤木本の巻一と巻三は、本館本とは自らなる先後関係を保つものであろう。

屢述して来た二十二丁裏の空白現象をここで重ね合わせれば、イメージがより明確になると思う。視線を巻一巻三以外の巻、すなわち、巻二・四・五・六・七・八の六巻に転ずると、今ここにテーターは提示しないが、本館本と赤木本、早大本三者の間にはほとんど差異はない。赤木本は、この六冊においては、本館本、早大本と極めて近い刷であ

るといつてよいだろう。

この三本の優劣論は、もちろん当面の課題ではない。

赤木本には、巻一と巻三に問題があり、本館本は、天地が裁断され、合綴改装されているという点がある。早大本はその意味では、原装を保ち、題簽も巻一から八まで備わり、刷も早いところからいえば、いわゆる平均点は高いということになるだろう。

しかし、早大本は、但馬国湯嶋(城の崎温泉)の貸本屋仲屋甚左衛門の蔵であったところからも察せられるように、かなり読みこまれた本といつてよい。

巻五見返しに「一週りかし代」として「但シ一日一夜ニ而も見料同断御座候ノ此外琴三味線かし物類品々并ノ薬種柳骨柳御土産何ニよらず御用被仰付可被下候」とあることも興味深い。入湯一巡、湯治客の徒然を慰めた経歴は、巻六の見返しに落書された「長く」と面白からぬ物語の一行に象徴的である。(確証はないが、一四・五八と二分して貸出されたらしく、偶然「二代男」の二部構成と合致している。)

それに対して、本館本は、これは主観的にならざるをえないが、前述の鼠害等をのぞいて全く手摺れも汚

れもなく、類いまれなうぶさを示している。原八分冊の時期も、合綴後も、ほとんど読まれなかったのではないか。この保存の良好さと隣合せ

に、巻四の二十二丁が、二枚重なつてあること、すなわち複丁をなしている事実を指摘しうるだろう。「分冊時代も気づかれず、改装の時にも気づかれぬままであつた」といいきることには問題があるにせよ、少なくとも本書が多人数の手を経たものでないことは疑いえない。その一証として、全一七二丁にわたつて版心部において裂けた(いわゆる腹われ現象)例がないことを指摘しておく。

伝来は一さい謎である。印記も書き入れもない。大げさにいえば、昨日刷つたままの美しさを今日なお保つている。その点奇蹟的といつてよい。四十九年度本館が購入しえた書物の中で、わけて本書一点を選んで紹介するゆえんである。

本書の調査には、文献資料部第三室、松田修・日野龍夫・加藤定彦三人が当つた。調査のさい、天理図書館木村三四吾氏、早稲田大学附属図書館柴田光彦氏の協力と、ご指示をえた。(文責・松田修)

海彼に学んだこと

—アメリカ・ヨーロッパのたび—

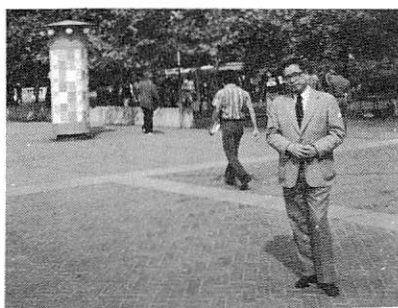
松田 修

齢四十代の終りに臨もうとして初めて海外旅行、それも出発から帰着まで一人で通したのであるから、私にとっては、まさにちよつとした冒険であつた。英語圏、西語圏、仏語圏を周るというのに、こ他聞に洩れず、語痴である。片言の英語と、片言以下の仏語(昭和二十一年に一月習つただけ、「ほんのほんの少し」とは *un petit peu* というらしく、これをマクラにふれば、フランス人の中華思想をくすぐる面もあつて、私はしきりに使つた。)西語にいたつては、エンチラータやトルチヤス、タコス等々レストラン用語の片端しか知らない。しかも、出発前せめて一か月でもレッスンを受けて思いながら、毎日の公務でその余裕もない。商事会社の兄に相談したら、心配するな、これさえあれば大がいに通じると手渡してくれた一冊、黒表紙の六か国語会話集、正に杖にも柱にもとポケットへしまひこみ、さて、太平洋上空、日航機上で繻い

てみると、ビルマ語、タイ語、インドネシア語、中国語……つまりは東南アジア用と間違つてのアレセントであつた。機内でのアナウンスに必死で耳を傾けるのだが、その三分の一ぐらしか聞きとれない。ままよ、各地で面会するのは、日本語ができ、日本文学がわかる人なのだから、と腹をくくつて一寝り、はやサンフランシスコの夕暮であつた。

空港には州立大学の熊倉千之氏の出迎えを受けた。サンフランシスコ滞在中は氏の献身的な協力をえて、カルフォルニア大学のバークレー分校所蔵図書について、書庫内検索を行った。旧三井家文庫本は、これも書庫内立入りを許されたが、短時間という要素もあつて、日本古典については、さほど食指が動かかなかった。むしろ近代文学には稀観書のコレクションがあり、専門外ながら食指が動いた。チエアマン、マツカラー教授との懇談で、今後リストアップ等に日本側の協力をえたいということ

は、保存良好のものも多く、これらのリストアップについては、熊倉氏個人の立場での今後のご協力をとりつけた。



カルフォルニア大学バークレー分校にて

メキシコでは、林屋公使のお言葉添えをいただいたが、私の机上計画そのものに無理があつて、所期の目的を達成することはできなかった。

ただし、国立博物館等において、種々好意的な待遇を受けることができただけではないが、厚生省局長の Albert Morales 氏一家から、滞在中献身的なご協力をえた。(武山初子氏にもお世話になった)

ワシントンでは国会図書館に行き、その膨大な日本関係書に圧倒されたが、木版本・写本類は、私の見聞のかぎりにおいて僅少であり、中でも

写本は、近世を中心として文書類が多く、当館としては、今後アプローチの必要はないと判断した。

ニューヨークでは、コロンビア大学図書館の甲斐美和女史のお世話で、庫内調査をすることが出来た。同女史は、コロンビア大学側では、現今日本文学関係書の複本整理を実施中であるが、草創期の国文学研究資料館として、それら複本中に必要なものがあれば、寄贈するようはからつてよいともらされた。送付していただいた複本リストから必要なものをチェックして返送すれば、船便で頂戴できるわけである。どれほど希望書があるかは問題外として、一たん日本から出たものが、還流するわけで、国際親善の上からも、こういう試みが実現することが望ましいと思つた。

ニューヨークでは、メトロポリタン美術館に通つて、版本類をできるだけ拝見した。同館では四日間通つたが、その間の館員の方々のご高配は一方ならぬものがあつた。

ニューヨーク市立美術館のスペンサーコレクションは、今日まで比較的に注目されていなかったのではないかと思うが、ここにも時間の許すかぎり通つた。

年若くしてタイタニック号の事故のため没した資産家の視点は、もちろん美術に注がれているのであつて、文学の側にはないが、それにしても馬琴の自筆稿本など、垂涎の書を手に入れることが出来た。私の一つの感動は、メトロポリタンでも、スペンサーコレクションでも、資料のとり扱いが実に鄭重、これれ物を扱うの趣きがあつたことである。

たとえば、私たちが「いや」「私」といつてもよいが、ほとんど何のこだわりもなく、書物の左下端をめぐっているのが、館員から「そ

こは今まで、多くの人によつてめくられ、十分いたんでいる。目に見えぬまでも、いたみを藏している。それを防ぐためには、左上端、ないし中央をあつかうように」と注意され、冷汗をかいたことであつた。もちろん、稀覯の古書籍、美術品をあつかうスタイルが、近世末の雑書にも適用されるべきかどうか、問題があるだろう。しかし、古い資料への取扱いのスタイルが、このように折り目正しい形で、みごとに継承されている事実は、注目に値する。寶石に対する態度と石瓦に対する態度とは自ら異なるなどというよりも、石瓦でさえ宝石同様に遇する精神を、高

く評価すべきではないだろうか。スペンサーコレクションでの最後の日、それまでの数日、閲覧名は私一人であつたが、珍らしく相客があつた。しかも日本人、ハーバード大学のクランストン助教夫人であつた。ポストンからエアバス(シヤトル便)で一時間、その距離を物ともせず、地道な研究が積み重ねられている事実を私はあらためて認識した。その名はきき洩したが、方角音痴の私のために、走つてまでバスに乗せてくれた青年館員の澄んだ目は私にとつて忘しがたい。

この地ではおりからコロンビア大学に交換教授中の山崎正和氏、裏千家の山田久氏、メキシコでの出会い以来の松任谷国子氏にお世話になつた。ハーバード大学では、京大人文研からの熊倉功夫氏夫妻に何から何までご迷惑をかけた。大げさというわけではなく、衣食住にわたつて——。ロウスクールや、フォッグミュージアム、ハーバード燕京の図書類を自由に閲覧できたことは、氏のご協力のたまものであつた。

板坂元氏にも、多大のご迷惑をかけた。日本の方だけではなく、ハーバード大学の日本文学関係の方々、ヒベツト教授、ルービン助教、ク

ランストン助教たち——。

博士コースの学生諸君を対象に、私の「『好色一代男』論」を講演したことも、忘れがたい思い出である。学生諸君は皆テクストに、岩波の大系本を扱っていて、質問もシャープであった。

ボストン美術館では、とくに梅尾博士にお世話になった。

ボストンからロンドンへ、初めてのアメリカから初めての欧州へ——。ロンドンでは、客員として活躍中の共立女子大学、井上英明氏にお世話になった。大英博物館では、外務省を通じて、依頼してあった南方熊楠研究について、便宜を払っていた。私の泊っている安ホテルの五分と離れぬところに、彼の下宿先があったことは、私だけにしか通じないこととしても感激的であった。

ロンドンからケンブリッジへ。やりにもよって雨の日であったが、伝統のある古い大都市の雰囲気につきり魅せられてしまった。

大学の図書館では、セシリア嬢にお世話になった。彼女にかぎらず、欧米の図書館における女性の進出はめざましいものがあり、いわゆる管理職についている人々も多い。

案内されて、アーネストサトウの

蔵書などのある、貴重書庫へ入れてもらった。節電のため、書庫の電灯は半分しかつかない。学問の世界にも不況の風はふきすさんでいるようであった。幕末の雑書が多いが、遠い日の知日家が、鋭意集めた書物と思えば、その一冊一冊がみずこしがたいものに思われた。

今回の旅行で最も驚いたことは、この貴重書庫、アーネストサトウの蔵書の中に、あろうことか、一冊たり、松田修解題「上方洒落本集」がまさりこんでいるではないか。これは一体どういうことなのか。分類ちがいが、何の間違いか。各地の図書館に、「近世日本文学の成立」をはじめとする拙著が、購入されていることは、私にとって喜びであったが、このサトウ蔵書の中の「上方洒落本集」にはまいった。感激的であった。パリでは折あしくストライキに出あって、電話もほとんど機能せず、日本文学の研究家とのコンタクトもとれず、結局立ち往生きみであったが、それでも、国立図書館の小杉恵子女史のご協力で、種々の調査を進めることができた。ギメー博物館でも土宜法龍に関する資料を、オーシユコロン女史から提供していただいた。私の現代語訳によって「本朝」二

十不孝」を仏訳刊行するというルネシェフェール博士にもやっとお会いできた。ボストンでは、通学バス問題について、州兵が出動し、ヘリコプターの出る騒擾にでくわした。ロンドンでは、どの公共物にはいる時も、鞆の中身をチェックされた。その意味ではパリはのんきであったが、そのかわり、大ストライキで、私のゆくさきさきに、事件がついてまわる

文献資料部事業報告

大久保正

地域別会議の開催

一、国文学文献資料調査員中部
近畿地区会議の開催

前号には、昭和四十九年七月末日までに当部で行った事業の概要を報告した。本号では引続き同年八月一日以降、同年十二月末日までの事業経過について記すこととする。

九月十三日、京都大学薬友会館において開催、各調査員より本年度における文献資料調査の状況について報告がなされ、また当部の調査計画についても質疑応答が行われた。当部からは福田・日野の両名が出席した。

二、文献資料調査員関東地区会議の開催

本年度は当部の人員も整備され、マイクロフィルム収集には予期以上の成果を挙げることができた。これもひとえに学界その他各方面を挙げた御協力の賜物と、紙面を借りて深謝の意を表する。

十二月十八日、当館北館会議室において開催、調査員より本年度における文献資料所在調査状況について報告がなされ、また地区における調査上の問題点について指摘があり、

所蔵者の協力を酬いる方途につき、当館において検討してほしいとの要望が述べられた。当部からは、教官全員が出席した。

中京地区総合調査の実施

昭和四十八年度に引き続き、本年度も中京地区を調査重点地区とし、所期の目的を達成するため、各図書館の好意により、左記の総合調査を実施した。

一、刈谷図書館総合調査

十月一日―九日、十二月二十一日―二十六日の二回にわたって実施、後藤重郎調査員ほか十四名が参加し、所期の成果を収めた。なお昭和五十一年一月七日より第三回を実施する。

二、蓬左文庫総合調査

七月十四日より九月三十日までの間、日程表に基づき二十名の調査員が参加、総合調査を実施し、所期の成果を収めた。

昭和四十九年度文献資料調査および収集の概況

昭和四十九年十二月末日現在、各調査員より提出された文献資料調査カードは、書目点数九三九五点におよび、今後提出される分を加えると一十万点を超える見込みであり、昭和五十年以降における当部の収集計画の基礎資料として活用させていた

べく予定である。ほかに蔵書目録・研究紀要等の収集にも多大の御協力をいただいた。

次に昭和四十九年の事業として、十二月三十一日現在までに、調査員の御協力を得て当部で収集し得たマイクロフィルム資料の概況は左の如くである。

- 1 北海道大学附属図書館
- 「誹諧問答」ほか一五三点
- 2 北海学園大学附属図書館（北駕文庫）
- 「家長日記」ほか二五一点
- 3 酒田市立光丘図書館
- 「源平盛衰記国会」ほか八〇点
- 4 市立米沢図書館
- 「源氏物語」ほか一七〇点
- 5 彰考館
- 「職人歌合」ほか三〇八点
- 6 東京教育大学附属図書館
- 「竹取物語」ほか四〇九点
- 7 宮内庁書陵部
- 「兼好法師集」ほか五七〇点
- 8 内閣文庫
- 「袋草子」ほか二七一点
- 9 都立日比谷図書館（加賀文庫）
- 「芝居見立」ほか一九五点
- 10 鶴見大学附属図書館
- 「千載和歌集」ほか四八八点
- 11 長野県立図書館（関口文庫）

「百首異見」ほか四七点

12 刈谷市立図書館

「宇津保物語」ほか五二七点

13 本居宣長記念館

「古今集遠鏡」ほか二六一点

14 神宮文庫

「日本書紀」ほか一〇八点

15 京都大学附属図書館

「奥の細道」ほか二五八八点

16 賀茂別雷神社（三手文庫・泉亭文庫）

「堤中納言物語」ほか七三八点

17 香川大学附属図書館（神原文庫）

「誹諧百韻」ほか三〇二点

18 松平公益会（高松市）

「増鏡」ほか九三三点

19 金刀比羅宮図書館

「万葉集」ほか一〇七点

20 金刀比羅宮（宝物）

「保元物語」ほか五二点

21 個人所蔵（宮本家・松井家・家郷隆文氏）

「天狗草紙」ほか四二点

以上計四八九〇点であるが、ほかに購入した既成マイクロフィッシュに、

東京大学附属図書館酒竹文庫所蔵本の二〇〇二枚がある。

研究情報部事業報告

古川清彦

研究情報部は「国文学に関する研究文献及び研究に必要な情報の調査研究及び収集を行い、並びに国文学に関する文献その他の資料の整理、保存及び閲覧を行う（史料館の所掌に属するものを除く）。ことを任務とする（「国文学研究資料館組織運営規則」）。そしてこの任務を遂行するため、情報室・整理閲覧室・編集室・参考室・情報処理室の五室による研究情報部の体制が全面的に実施される運びになったのは、昭和四十九年四月十一日であった。（「国文学研究資料館の内部組織に関する訓令」）五室はそれぞれ「情報室は、国文学に関する研究文献および研究に必要な情報の調査研究および収集を行う。」「整理閲覧室は、国文学に関する文献その他の資料の整理、保存および閲覧を行う。」「編集室は、国文学に関する索引、目録その他の参考文献の編集および刊行を行う。」「参考室は、国文学に関する参考業務を行う。」「情報処理室は、研究情

報部の所掌事務の処理に関する電子計算機の運用およびこれに必要な調査研究を行う」と規定されている。この五室の有機的な関連によって共同利用機関として国の内外の利用者・研究者を対象とする時、(一)閲覧体制(二)共同利用研究者、(三)学会との関係等が重要眼目となり、開館準備が緊急課題となるのである。

共同利用機関の整備充実については學術審議会第三次答申(「學術振興に関する当面の基本的な施策について」昭和四十八年十月三十一日)も「このような研究所には当該研究所の目的に照らして適切な数の専任研究者の定員を設けるとともに、研究用の施設・設備と事務系統ないし技術系統の定員を完備するほか、リサーチ・フェローの定員、わけでも若手の研究者を受け入れうるような定員を用意することが必要であり、さらには内外の第一線の研究者がそこに招かれるような制度もなければならぬ」と記している。(「II、基本的施策の提案」)定員の確保とともに施設・設備の拡充が重要であることはこの答申の通りであるが、国文学研究資料館における建築の進行状態はこの条件を満足させるものではない。なお右の答申にもある専

任研究者と事務系統ないし技術系統の定員は、研究情報部においては、教官・事務官・司書・技官の協力体制となつて配置されている。特に、整理閲覧室における司書四名、マイクログラフ関係における事務官二名の配置はそれを示す。

また研究情報部を支えるものとして情報科学・図書館学・国際交流の三支柱がある。これは共同利用機関としての国文学研究資料館に要請される性格でもある。各室ともにこの問題に配慮しているが、整理閲覧室と図書館学、情報処理室と情報科学との関係は格別に密接である。

国際交流に関してはミルズ博士の来館が印象的であった。ミルズ博士は英国日本研究者連盟(The British Association for Japanese Studies)初代会長で、今年度国際交流基金の協力によって財団法人東方学会の招聘で昭和四十九年十一月二日から日された。十一月四日から七日まで関西方面を歩かれ、八日に国際交流基金を訪問。十一日に霞山会館における東方学会と国語国文学会連絡協議会共催の講演会および歓迎パーティに出席。講演題目は京都と同じく「外国における日本古典文学研究の課題―曾我兄弟の伝説をめぐって」

Mills博士講演「英国における日本研究」(要旨)

英国は明治以来 B. H. Chamberlain, W. G. Aston, E. M. Satow 卿という著名な日本研究家を出したが、彼等は日本で活動したので英国国内に日本研究の伝統を育てたわけではなかった。ひとり A. Waley だけは専ら英国内で活動し日本文学の紹介に大きな貢献をしたが、彼も孤高の人であった。

現在の英国の日本研究は戦時下の軍の日本語教育に端を発するもので、ロンドン大学の東洋アフリカ学院 SOAS とベドフォードの日本語学校がその中心であった。現在 SOAS のほかケンブリッジ大学とオックスフォード大学で日本の単位をとることができ、シェフィールド大学の日本語センターは地域研究として現代日本の問題を扱っている。ほかにリーズ大学の宗教学、ロンドン大学の外交史、ケンブリッジ大学の経済もそれぞれ立場から日本問題を扱っている。

なお国際交流基金からの援助が契機となって、英国日本研究者連盟「British Association for Japanese Studies」が組織され、Mills 博士がその議長に選ばれている。(文責情報室)



当館訪問のMills博士 (講演記録は東方学会『東方学』50集掲載予定)

であった。十二日は国文学研究資料館・近代日本文学館・近代文学博物館・国立公文書館内閣文庫を見学、その際、池田重氏(千葉大学)と古川が同行した。十三日は教育会館における東方学会と国文学研究資料館との共催による懇談会で講演(英国における日本研究)後、本館招待の晩餐会に出席。十一月十六日、離日帰国。以上二週間わたる滞在活動は、ケンブリッジ大学のコープスクリスチカレッジのフェローでもある博士が、アーサー・ウェイレー以来の英国の日本古典文学研究の伝統をつぐ学者として、今後の日英学術交流に大きな寄与をされたものと思われる。なお財団法人東方学会(Institute of Eastern Culture)の事務局は千代田区西神田二丁目四の一(電話二六一一〇六二)にあり、「東方学会報」を発行している。

一、情報室

情報室は各学会・大学・研究所・出版社等の協力を得て、雑誌・紀要等約八〇〇種の収集を行ってきたが、単行本研究書については、これをど

のような方針で扱うか検討中であつた。

このたび、国文両部で検討した結果、当館が発行する『国文学研究文献目録』に単行本解説として掲載するものうち、近世以前に関するもの(年間約五〇〇件)は、できるだけ出版社等の協力を得て収集し、利用に供するよう努力することとなつた。このため情報室では、現在、中央・地方の新聞・書店の記事・目録その他から抽出している国文学に関するニュース情報のうち、出版に関するものを整理し、寄贈の依頼を行える体制をととのえつつある。

また図書館に関する情報として、まず公立図書館約一〇〇〇に対し、所在地・交通機関・休館日・開館時間・特殊文庫の状況等国文学研究者が利用するために必要な情報をアンケートにより収集しており、これを整理して利用に供するよう準備を行っている。

『国文学研究資料館報』は昭和四十九年度内に四号まで発行し、年二回発行の体制が整つた。

なお、全国的規模の国語国文学会連絡協議会には当室から毎回出席し、各学会から提起された諸問題や要望を当館の運営や業務に生かすよ

う努めている。ちなみに連絡協議会の事務局は現在、東京女子大学日本文学研究室内(責任者、西尾光雄教授)にある。

二、整理閲覧室

整理閲覧委員会。第九回(七月十九日)、「マイクロ委員会についての報告とその検討」。第十回(八月十二日)、「閲覧の基本問題について」。第十一回(九月六日)、「本年度下半期の協議事項及び日程」。第十二回(九月二十七日)、「閲覧室の使用計画、閲覧用機の購入について」。第十三回、同上(十月二十五日)。第十四回、同上(十一月二十九日)。第十五回、同上(十二月十七日)。以上を通じて本館の閲覧体制の基本問題について各部館の意見の一致がみられたが、細部についてはなお検討する必要がある。

なお情報処理室と連絡して、版本約二、三〇〇点、マイクロフィルム約五〇〇〇点の整理をコンピュータを使って行つた。この経緯を基礎として本館の資料の整理方式を考えていきたい。

マイクロフィルムに関しては収集された全点について閲覧用としてポジフィルム、又は紙焼写真本が作成

されるが、その整理・閲覧方式を検討するためマイクロ委員会、マイクロ室運営委員会と連絡調整している。また本館が収集するマイクロフィルム・写本・版本・活字本・雑誌紀要のすべてにわたる分類方法を検討するために両部教官の打合わせを行っている。その他、寄贈を受けた雑誌紀要の製本準備、日常の図書館業務も行つている。

三、編集室

『国文学研究文献目録』(昭和四十七年版)は、現在五十年三月刊行を目指して編集中である。また四十八年度版および四十九年度版も、前三号に記した文献目録委員会各位の御協力のもとに並行して編集中である。

文献目録委員会は第三回(四十九年九月二十四日)、「四十七年版正誤表について」、「四十八年版配列について」、「年鑑移行について」等。第四回(十一月十六日)、「四十八年目録の編集方針、国語学・国語教育の分類」等の順で開催した。

なお、「国文学研究資料館紀要」第一号も、館報紀要委員会の企画のもとに当室で編集業務を進めており五十年三月末刊行の予定である。

四、参考室

恒例の公開講演会(第三回)が十一月七日(木)午後六時から「源氏物語」をテーマにして朝日講堂で左記の次第で催され、盛況であつた。協賛、国語国文学会連絡協議会、後援朝日新聞社。

開会の辞(古川)、挨拶(中古館長)

「源氏物語をどう見るか」

東京大学教授 秋山 虔

「源氏物語と和歌」

歌人・実践女子大学教授 木俣修

閉会の辞

東京女子大学教授 西尾光雄

司会 本館 本田康雄・伊井春樹



木俣 修教授



秋山 虔教授

なお、この講演会の企画・連絡は参考室が担当した。
ほかに参考室の業務の企画・参考資料の検討も行った。全般的な開館準備・各種委員会の進行状況を考察しながら、今後の具体的計画を進めていきたい。

五、情報処理室

(1) 国文学情報検索システム開発の一環として、整理閲覧室と協同で、図書整理システム作成テストの実施を試み、ほぼ満足する結果を得た。データは東大図書館から移管予定の図書二〇九四点を対象とし、基本カードの作成以後を機械化し、図書原簿、分類目録、書名目録、著者名目録の四種類の作成を行った。

(2) 九月よりシステム設計にとりかかり、文献資料検索システムの詳細を、十一月中に一応完成し、十二月十日に部内で説明会を開き、各室からの意見を徴した。今後それらを調整し、さらに他部からの意見も徴し、四十九年度内に完成させる予定である。
(3) 入出力用漢字字種選定作業もすすめているが、これについては手作業で行うことの限界を打破するため、コンピュータの利用を考え、その準備作業を二月中旬までに終了し、

検討資料をコンピュータで作成し、年度内に使用漢字案を作成する予定である。

以上の他、随時、漢字処理システムの検討、コンピュータ運用システムの研究等を行っている。また以上の作業に、情報検索委員会の指導と助言を仰ぐため、委員会を九月十九日(第三回)、十一月一日(第四回)、十二月十九日(第五回)と催した。十一月一日付で新任の奥出健事務官は情報処理室の仕事に従事している。

なお十一月一日付でマイクロ室職員として石塚誠事務官が着任し、マイクロ処理に関する技術研修に励むとともに暗幕の調整、暗室安全灯の設置等マイクロ室の整備を行い、昭和五十年新春早々仕事にとりかかる予定である。研修に際しては早稲田大学図書館文献複写室の御好意により、前後八日間にわたり撮影・処理等に関する指導をいただいた。
なお右の他、当館におけるマイクロ処理計画の一環としてD Dファイルム(Direct Duplicating Print File)等の研究も随時行っている。

国文学研究資料館評議員会議
(国文学部会)の開催

▼昭和四十九年十一月十三日、国立教育会館第二特別会議室において開催された。議事は左のとおりで、久松潜一議長はじめ八名の評議員が出席され、館報、講演会その他当館の事業について有益な助言をいただいた。

(1) 本年度の事業の進捗状況について

(2) 事業計画その他の管理運営について

▼昭和五十年二月五日、当館において開催された。議事は左のとおりで、久松潜一議長をはじめ七名の評議員が出席され、建設の促進をはじめ当館の事業について有益な助言をいただいた。
議題

- (1) 概算要求の結果について
- (2) 建築の見通しについて
- (3) 本年度事業の進捗状況について
- (4) 事業計画その他の管理運営について

人事異動

(昭和四十九年十月〜同五十年三月)

(採用)

昭和四十九年十月一日付

文部教官(文献資料部助教)

村上學

(静岡女子短大助教より)

(転入)

昭和五十年一月二六日付

文部事務官(管理部庶務課事業係)

(長)

朝日向吉晟

(東京大学より)

(転出)

昭和四十九年十月一日付

文部事務官(管理部会計課用度係)

(長)

草壁貞二

(文化庁へ出向)

受贈図書

昭和四十八年 七月
昭和四十九年十二月

(図書館・文庫目録等)

- 金沢大学図書目録(昭和三七―四六年)
- 嵯峨文庫伝教関係図書目録
- 玉野市立図書館郷土資料目録
- 石川県立図書館李花亭文庫和漢書分類書目
- 古文書等緊急調査報告書(金刀比羅宮所蔵古文書等調査報告書)
- 古文書等緊急調査報告書(弥谷寺所蔵聖教等調査報告書)
- 香川県東部史料蒐集目録1・2
- 高松宮御所蔵田有柄川宮御本マイクロフィルム目録
- 蓬左文庫善本解題目録第一―三編
- 大谷大学図書館善本聚英
- 龍谷大学図書館善本目録
- 大宰府天満宮蔵書目録
- 早稲田大学演劇博物館所蔵淨瑠璃本目録
- 神宮文庫漢籍善本解題
- 岩崎文庫和漢書目録
- 岩崎文庫図書目録
- 図書館典籍解題漢籍編・純文学篇
- 慶應義塾大学図書館和漢書善本解題
- 慶應義塾大学図書館蔵江戸期地誌紀行類目録稿
- 東大寺蔵国宝重要文化財善本聚英
- 秋田県立図書館時雨庵文庫目録
- 秋田県立図書館狩野文庫・岡文庫
- 青陵部和漢図書分類目録上・下・増加一・索引・正誤表
- 静嘉堂文庫図書分類目録・続・再続
- 静嘉堂文庫漢籍分類目録・続
- 東條家蔵書分類目録
- 東奥義塾開学百年記念史料展
- 盛岡市公民館郷土史料館展示資料収蔵目録
- 秋田県立図書館郷土文献目録3
- 鶴岡市立図書館蔵書目録2・3
- 致道館旧蔵の中国史書について
- 洪水文庫貴重図書目録
- 市立種子島博物館教科書目録
- 富崎県総合博物館日向古美術展図録
- 東京大学東洋文化研究所蔵逐次刊行物目録一九六八
- 玉里文庫目録
- 住田文庫目録
- 東北大学附属図書館漱石文庫目録
- 伊達家寄贈文化財目録(仙台市博物館)
- 九州文化史研究所蔵古文書目録九州大学史料編纂所図書目録刊本五索引
- 一橋大学経済研究所蔵書目録昭和四一年
- 県立長野図書館蔵書目録第三卷
- 富士宮市立図書館新受入図書目録
- 県立山口図書館新取図書目録
- 東京学芸大学紀要寄贈先及び受贈雑誌目録
- 東京大学総合図書館太学紀要類一覽昭和四八年
- 日本学術会議文科系文献目録
- 天理図書館蔵書第30輯逐次刊行書目録
- 愛知県立芸術大学附属図書館蔵書目録5
- 全国私立美術館所蔵作品作家目録1
- 福井大学蔵書目録第三編
- 福井山慈眼堂書庫現存漢籍分類目録
- 長福寺書庫目録
- 言語学資料集成(静嘉堂文庫)
- 岐阜大学雑誌目録欧文篇一九六九・同補遺
- 岐阜大学雑誌目録和文篇一九七〇
- 京都女子大学図書館報吉沢文庫目録
- 京都女子大学雑誌目録昭和四八年
- 日出町立萬里園図書館郷土資料目録第一集
- 九州芸術工科大学附属図書館増加図書目録昭和四八年
- 岡山大学所蔵近世庶民史料目録一・二卷
- 岡山大学所蔵池田家文庫総目録
- 岡山大学蔵書目録第9卷
- 天理図書館蔵書分類目録第2
- 福井大学蔵書目録第一編・第二編
- 津山工業高等専門学校第三号(A)
- 金沢大学図書目録昭和四五・四六年度
- 東京学芸大学蔵書目録第一冊分
- 長崎大学学術雑誌目録欧文編
- 東京芸術大学附属図書館取書目録No.11
- 一橋大学経済研究所蔵書目録昭和四四年
- 北海道大学図書館収集通報七・八号
- 鳥取大学附属図書館蔵書目録第一卷
- 東京大学医学図書館雑誌目録一九七三
- 京都大学欧文雑誌総合目録一九七三
- 自然科学編
- 新潟大学増加図書目録昭和四八年
- 和歌山大学附属図書館真砂町分館蔵紀州藩文庫目録
- 国立国会図書館官公庁出版物目録昭和四四・四五年度版
- 国立国会図書館地図目録
- 国立国会図書館雑誌記事索引(人文・社会編)二四卷七号、二五卷三・四・五・七号、二六卷一・二・三
- 国立国会図書館雑誌記事索引(科学技術編)二三卷三・四・六号、二四卷二
- 神戸大学附属図書館甲百分館増加図書目録昭和四八年
- 彦根市立図書館郷土資料目録第一・九集
- 県立浦和図書館蔵書目録
- 県立浦和図書館蔵書目録昭和四三・八四・四四・四六年
- 宮崎県立図書館蔵書目録一―三卷
- 市立所沢図書館増加図書目録第五
- 八景丹後郷土資料目録
- 明石工業高等専門学校郷土関係資料目録三集
- 東洋学文献類目一九六三―一九七〇
- 鶴見女子大学日本文学科学研究室目録抄
- 香川大学増加図書目録昭和四九年
- 都立中央図書館蔵書目録一九六六―一九七〇自然科学・工学・産業
- 目黒区立守屋図書館個人全集内容目録
- 東北大学附属図書館別道本日録昭和三六―三九年
- 東京大学史料編纂所図書目録刊本五
- 静岡大学附属図書館蔵書目録昭和四六年
- 県立長野図書館蔵書目録第四卷
- 岡山大学近世庶民史料目録第一・第二
- 名古屋大学教養学部雑誌目録一九七二
- 岡山県総合文化センター増加図書目録第2卷
- 大阪府立大学図書館増加図書目録昭和四七年
- 今治市河野信一記念文化館図書分類目録
- 静岡大学雑誌目録和文篇一九七二
- 金沢大学図書目録十一卷昭和四七年
- 市立函館図書館蔵郷土資料分類目録八分冊(昭和四四―四五年度)
- 千葉大学蔵書目録和漢書昭和四〇―四五年
- 山形県立図書館蔵書目録語学・文学
- 市立松本図書館増加目録昭和四八年
- 三次市立図書館昭和四七・四八年受入郷土資料リスト
- 神奈川県立図書館蔵書目録和書の部七
- 石川県立図書館蔵書目録哲学・宗教篇
- 愛知県立大学附属図書館蔵書目録(4)
- 愛知県立大学附属図書館特別書庫目録(一)
- 池田文庫増加図書目録第一九
- 市立会津図書館蔵書目録(郷土資料)

- (部)昭和二七・四一年
- 市立津田図書館郷土資料増加目録
- 宮城県図書館蔵書目録(昭和三三年)
- 福岡県近世文書目録第一―三集
- 明治大正著名人書簡目録
- 福岡県立文化会館郷土関係資料目録
- 福岡県文化会館今中資料目録
- 福岡県文化会館河内資料目録
- 福岡県文化会館近世文書目録第一・二集
- 筑前国近世史料目録
- 宮崎文庫石炭資料展目録
- 八戸市立図書館文庫報八戸青年会資料目録・百仙洞文庫俳書目録
- 愛知学院大学附属図書館正眼寺文書目録
- 神宮徴古館品録目録
- 新築町立図書館図書目録
- 名古屋市鶴舞中央図書館深山文庫図書目録
- 名古屋市鶴舞中央図書館名古屋市史資料目録
- 竹田市立図書館郷土資料目録
- 県立鳥取図書館郷土資料目録追録
- 福井県立図書館増加図書目録一―四
- 栃木県立図書館所蔵黒崎文庫目録・野口文庫目録・大山文庫目録
- 栃木県立図書館所蔵郷土資料目録第一集
- 新築田市立図書館郷土資料蔵書目録
- 桃山学院大学雑誌総合目録一九七四
- 花月文庫分類目録
- 早稲田大学図書館文庫目録第一集
- 早稲田大学図書館視聴覚資料目録第一集
- 三康文化研究所附属三康図書館蔵内田文庫目録

東京大学新聞資料センター所蔵目録・新聞バックナンバー総目録

- 愛知立芸術大学附属図書館蔵書目録
- 同楽譜追録篇・雑誌目録
- 郷土資料目録(1)―(8)(下関文書館)
- 椿惣一先生資料目録(下関教育委員)
- 逐次刊行物目録昭和三四・四四年(国立国会図書館)
- 中世文学関係資料展目録(中世文学会昭和四〇年春季大会)
- 沖繩県立図書館要覧一九七二年
- 弘文社古版本目録(弘文社)
- 図書館学資料目録(東京大学総合図書館図書資料室)
- 日本昔話文庫資料目録(京都女子大学稲田研究室)
- 金沢文庫蔵書目録第四、兼好徒然草諸本編
- 受入九雑誌目録昭和四九年(福井大学附属図書館)
- 千葉大学購読雑誌所在目録一九七四
- 福井県立図書館増加図書目録
- 静岡県天竜市西藤平、大高部睦夫氏所蔵近世古文書目録(国学院大学地方史研究会)
- 前田富郎文庫目録(栃木県立図書館)
- Accessions Katalog (1966~1967) "Över Umlandet"
- A Classified List of books in Western Languages relating to Japan (Kokusai Bunka Shinkokai)

(図書)

- 附音増廣古注蒙求(初尾武)
- 蒙求和歌(初尾武)
- 高山果のあゆみ(高山果)
- 讃岐に於ける昔公(鎌田米)
- 細川清氏と細川頼之(猪熊信男)
- 讃岐偉人久米左衛門翁(鎌田米)
- 現在日本最古の歌舞伎劇場「金丸座」の実態調査及復元(佐藤考義、他)
- 王朝、第一―6巻(王朝文学協会)
- 芸能の科学4、芸能資料集III(国立文化財研究所)
- 郷土の文学上田の俳諧(上田市立博物館)
- 郷土の歴史城下町上田(上)(同右)
- 国語国文学研究文庫目録昭和四五年(至文堂)
- 折口信夫、柳田國男論(山下澄子)
- 澄(同右)
- 茂山乙本古今和歌集(東京ペン字教育会)
- 生駒・山崎、京極史談(吉岡和喜治)
- 日光市史料第一集(日光市史編纂委員会)
- 児童文学の誕生(統橋達雄)
- 海浜独唱4(御津磯夫)
- 東子の文学碑II(愛媛国語国文学会)
- 七十五番歌合(佐藤高明)
- 蜻蛉日記(同右)
- 米国における日本研究(外務省文化事業部)
- 戦後「太平記」研究文献目録(名古屋大学軍記物語研究会)

ハリス夫人記土佐日記(新谷武四郎編)

- 邦高集(松野陽一)
- 日本漢学文芸史研究(東京教育大学文学部)
- 貞門俳諧目録百韻(翻刻と研究(近世初期文芸研究会))
- 世初期文芸研究会
- 光厳天皇全歌集及解説(谷山茂、国枝利久校閲)
- 後撰和歌集研究史(田島敏堂)
- 古典学に於ける秘伝と古今和歌集の文芸理念(原稿)(西義一)
- 科学的研究補助金に関する懇談会、同記録抄(日本学術会議)
- 将門記、研究と資料(梶原正昭)
- 源氏物語の根本的研究(西義一)
- 新注山路の露(本位田重美)
- 新撰正徹千首(藤原隆景)
- 類書評釈徒然草(眞倉徳次郎)
- 中世散佚歌集の研究(坂瀬一雄)
- 東北大学川内分校本竹林抄(兼岸義秋、町田三郎)
- 中世の人間像(西田正好)
- 平家物語論(井手恒雄)
- 日本文芸史における無常観の克服(同右)
- 中世日本の思想と文芸(同右)
- 無常感の文学(小林智昭)
- 欧米人の能楽研究(古川久)
- スワヒリ語対照イラク語基礎語彙集(アジアアフリカ言語文化研究所)
- 三国町史料(三国町史編纂委員会)
- 常陸下総俳諧史資料年表(柳生四郎)
- 大日本史料、第五編二四、第七編二一、第一編一七、一八、第二編四六(東京大学史料編纂所)
- 大日本古記録小石記七、言経卿記八、建内記四、(同右)
- 大日本近世史料編修地誌備用典編解題、幕府書物方日記六、七、九、諸問屋再興測(二)(同右)
- 保古飛呂比、佐々木高行日記一、四(同右)
- 大日本古文書家わけ第一七、幕末外国関係文書二五(同右)
- 大日本維新史料類纂之部、井伊家史料八(同右)
- 明治維新史料選集上(同右)
- 心散の世界(岡本彦一)
- 東京国立博物館百年史索引(本編)(東京国立博物館)
- 三田の折口信夫(慶応義塾大学国文学研究会)
- 平安文学の研究(平安文学研究会)
- 東京国立文化財研究所20年のあゆみ(東京国立文化財研究所)
- 栄花物語論攷(河北勝)
- 栄花物語新註(同右)
- 栄花物語研究(同右)
- 徒然草の味わい方(佐々木八郎)
- 中世小説の研究(市古貞次)
- 雑談集(中世の文学)(三弥井書店編)
- 詩の味わい方(黒田三郎)
- 寛政期諸国俳人書簡集(大田可苗宛)(養仲寺史蹟保存会)
- 普通寺市の古代文化(普通寺市役所)井上通女全集修訂版(井上通女全集修訂委員会)
- 京都女子大学本源語花錦抄、同別冊(京都女子大学)
- 動物形容詞問題語用例集(国立国語研究所)
- 白氏文集卷三、四、六、九、一二、一七、二一―二四、二七、二八、三二、

三三三(京都大学人文科学研究所)

シエイクスピア序説(児玉久雄)

受胎告知の図像学(渡邊健治)

共立女子学園創立八十周年記念論文

集(共立女子大学家政学部編)

笑いについて(共立女子大学芸学

部)

歌集黒潮(太田進一)

送り仮名の枝折(森寺勝秀)

文化財叢書1140巻(名古屋市教育局

委員会)

明治の名古屋人(同右)

写真に見る明治の名古屋(同右)

下長磯操翁式三番叟人形(下長磯操

翁式三番叟人形保存会)

(歌集)菩提樹(古川リウ、古川清彦編)

かな解読字典(中田易直他編)

本邦現存による編撰資料集成、同続

(京都大学人文科学研究所)

仏教説話研究、附「今昔物語集」研究

文献総覧(石橋義秀)

むかしの宿、むかしの旅(小丸俊雄)

万有百科大事典6日本歴史(小学館)

創立十周年記念論文集(独協大学)

平家物語の達成(佐々木八郎)

五千巻堂集全6冊(小倉直恒)

房総諸家著述目録考(旭寿山)

九州の芭蕉城(川上茂治)

「七里の渡し」考(野田千平)

心中天網島探三番叟(国立劇場芸能

調査室)

村上忠順集紀行編(村上正雄)

熊野那智大社文書第1、2巻(田林

義信)

演会昭和四九年)

王朝—遠藤嘉基博士古稀記念論叢

(王朝文学協会)

日本古典全集、新訂萬葉集1、2、3、

俳諧七部集上・下、井原西鶴集一、

三、四

平家物語論集(貫志正造)

原典をめざして(橋本不美男)

定家歌論とその周辺(福田雄作)

日本の古典(朝日新聞社)

国姓爺合戦(日本古典文学会)

派草原解(藤井喬)

全国大学一覽(文部省大学局)

全国短期大学・高等専門学校一覽

(同右)

演芸画報総索引人物篇(国立劇場芸

能調査室)

「歌謡伎の型」4雁のたより(同右)

歌心点描、短歌へのいざない(松原

三夫)

評歌風無常物語(愛媛近世文学研究

会)

猿丸集と猿丸大夫説話(佐々木孝二)

広島県の年中行事、芸北地方の盆と

盆踊(新藤久人)

香川県下の文芸雑誌についての報告

(松原秀明)

盆踊りくとき、諸国音頭集(成田守)

浦江音頭口説集(倉田隆延)

長町女腹切(祐田先生記念会)

三木家俳句集(三木興吉郎)

言語と文芸(東京教育大学国語国文

学)

新藤浅井了意(北条秀雄)

頼原文庫本冬の日尾張五歌仙(同右)

文章表現法大要(今井文男)

西野浦音頭口説集(倉田隆延)

神奈川県郷土文学資料(神奈川県教

育委員会)

歌集続スモン(大須賀舞忠)

派草原解(藤井喬)

コミュニケーション行動と様式(東

京大学新聞研究所)

国木田独歩の文学(北野照彦)

源俊頼の研究(池田富蔵)

昭和文学ノート(辻橋二郎)

校本枕冊子総索引第1、2部(古典文

庫)

世界経済問題研究叢書第11輯(近畿

大学世界経済研究所)

中古説話文学研究序説(高橋賢)

わが国における土地改革の歴史的経

験(ジョン・ヒョニヤン)

日本美術年鑑一九七三(美術研究所)

金刀比羅宮記、生駒、山崎、京極史

談(附一郷土俳諧史話)

酒田の歴史(本間美術館)

芭蕉の遺墨(同右)

Glimpses of unfamiliar Japan

Vol. I, II (Lafcadio Hearn)

Ito Jinsai (Joseph John Spee)

Bluejackets with Perry in

Japan (Henry F. Craft)

Index to Japanologist 1972

(Japan Pen Club)

Origins of the Companion Li-

brary: An Anthology of Media-

val Japanese Stories (Barbara

Ruch)

◆編集後記◆

▼第九回国語国文学会連絡協議会(

昭和四十九年四月二十二日、於東京

女子大学)において、論文要約の件

が討議され、会議参加者は各論文に

要旨を付けるという方向で、所属学

会に働きかけることになりました。

当館でもその意向に沿うため、第

十一回連絡協議会で講義された水谷

静夫教授に、論文要旨について執筆

していただき理解を深めるとともに、

本年三月創刊の研究紀要から論文要

旨を付載して、趣旨に沿うよう努力

しております。

▼昨年十一月十三日の評議員会にお

いて、事業の進捗状況について量だ

けでなく質的な内容も紹介すべきで

あるとのご意見をいただきました。

その一つとして本号では当館新収の

「好色一代男」について、第三文獻

資料室からの報告を掲載しました。

昭和五十年春季学会開催一覽

国語国文学会連絡協議会に参加する学会の春季大会一覽表を掲げる。

なお、第二回連絡協議会において日本文芸研究会の新加入が認められたため、連絡協議会参加学会は二三となった。また、一覽表作成に際しては連絡協議会事務局の枋尾武氏の御協力を得た。学会掲出はアイウエオ順、以下、①事務局(東京都)は省略)②大会開催日③会場の順

解釈学会①豊島区西果鴨一―二四―
一四教育出版センター内②八月③
東北大学

近代語学会①世田谷区太子堂一―七
昭和女子大学文政学科国語研究
室②七月五日③昭和女子大学温考
館

国語学会①千代田区神田錦町三十一
一武蔵野書院内②五月三―六月
一日③大谷女子大学

古事記学会①神奈川県藤沢市片瀬山
二一九一―藤井信男方②六月二
一―三三日③羽黒三山神社

古代文学会①埼玉県川越市今福四六
一田園ハイツ一―〇九高橋方②
八月第一週金―日③箱根明治大学
仙石寮

上代文学会①文京区白山五―二八―
二〇東洋大学国文学研究室②五月
一七―一九日③鹿児島大学

説話文学会①渋谷区東一―一―二
実践女子大学国文学研究室②六月
二九日③実践女子大学

全国国語国文学会①千代田区神
田駿河台一―明治大学日本文学
八二二研究室②六月七―九日③専
修大学神田校舎

中古文学会①昭和女子大学日本文学
研究室②五月二四―二五日③昭和
女子大学

中世文学会①新宿区戸山町四二早稲
田大学文学部伊地知鉄男研究室②
五月一七―一八日③早稲田大学

日本演劇学会①新宿区戸塚町一―六
四七早稲田大学演劇博物館内②五
月三―一日③日本大学江古田校舎

日本歌謡学会①国学院大学文学第二
研究室②五月一〇―一一日③専修
大学神田校舎

日本近世文学会①早稲田大学文学部
神保五弥研究室②③未定

日本近代文学会①小金井市貫井北町
四一―一―東京学芸大学教育学部
橋本芳一郎研究室②五月一七日③

中央大学

日本文学協会①豊島区南大塚二―一
七七―一〇②③秋季大会のみ

日本文学風土学会①昭和女子大学短
期大学部高橋良雄研究室②五月二
四日③昭和女子大学温考館

日本文芸研究会①仙台市川内東北大
学文学部内②六月七―八日③東北
大学

俳文学会①豊島区目白一―五―一学
習院大学国文学科研究室②一〇月
二五―二七日(年一回秋季大会の
み)③宇都宮大学

表現学会①名古屋守山区大森二二
八二―二金城学院大学国文学研究
室②五月二四―二五日③防衛大学
島平一―九大東文化大学日本文学
第二研究室(西部)京都市下京区
七条大宮上ル龍谷大学②六月二九
日③名古屋大学

万葉学会①大阪府吹田市千里山東三
丁目関西大学国文学研究室②七月
六日③帝塚山学院大学

美夫君志会①名古屋市中区和区八重本
町一〇一中央大学国文学研究室②
七月下旬③中央大学

和歌文学会①千代田区三番町六一―二
二松学舎大学国文学研究室②③秋
季大会のみ

国文学研究資料館紀要第一号

兼良の源氏学の形成 伊井春樹

―二条家の秘説から「花鳥余情」へ―

神道集の序章試論 村上 学

―表現されざるもの意味―

「嘉吉物語」の形成 和田英道

―義経伝説と諸本―

「天狗の内裏」攷 徳田和夫

式亭三馬の合巻と読本 本田康雄

白子屋一件 内田康廣

本居宣長書簡二通 大久保正

―翻刻と考證―

(昭和五十年三月発行)

国文学研究資料館報 第四号
昭和五〇年三月三〇日 発行

編集・発行者

国文学研究資料館

東京都品川区豊町一―六一―二〇

郵便番号一四二

電話(七八三)九一〇六(代)

印刷所 ウチタ印刷株式会社